

# 本学学生の生活意識—その3—

依田 明・坂東清美

## Attitudes of the Freshmen toward University and College Life (3)

Akira YODA\* and Kiyomi BANDO\*\*

### SUMMARY

We inquired of the freshmen who entered Yokohama National University in April, 1969, about their attitudes and expectations toward the college life. In the period of years after this investigation, the system of the entrance examination of universities has changed considerably.

We made the reinvestigation to see the substantial change, which we had felt empirically, effected by the reformation of the educational system in this period.

The findings obtained were as follows:

- (1) The students were from all over Japan.
- (2) Their purposes to enter the university were to obtain good vocations or jobs, rather than academic purposes.
- (3) They chose the university by the result of school credits, rather than by the specific reason, such as quality of education given at or equipments provided at the university.
- (4) They had been satisfied with their high school life.
- (5) They were dependent on their parents or families considerably.
- (6) They expected "to play sports, sparing efforts" and "to enjoy being with classmates".
- (7) On the whole, their purposes were to enjoy the college life without endeavor rather than to study hard.

### はじめに

昭和58年3月、共通一次試験を受験し入学した学生が卒業していった。われわれは、以前にくらべると学生に質的にかわってきたことを、漠然と肌で感じている。客観的にみて、学生の生活意識が変化したといえるであろうか。われわれは、かつて昭和42年度、43年度に本学に入学した新入生を対象に質問紙法により生活意識の調査をおこなっている。十数年を経て、57年度の新入生と再調査を施行した。

### 1. 目的と方法

調査の目的は、昭和57年度に本学に入学した学生の社会的背景、生活意識を明らかに

\* 心理学教室 (Dept. of Psychology)

\*\* 大学院学生 (Dept. of Psychology)

し、前回の調査結果（昭和43年度の新入生を対象とした調査）と比較するところにある。

使用した質問紙調査票は、前回の調査とまったく同じものである。使用した調査票は、文献2に記載してある。調査票には、つぎのような内容がふくまれている。① 大学進学目的、② 高校生活や受験生活の評価、③ 大学生活への期待、④ 理想的な大学生像。

調査は、43年4月中旬から下旬にかけて、「心理学」の受講生を対象におこなわれた。被調査者数を学部別、男女別に示したのがTable 1である。教育学部以外の3学部は、男子学生のみを集計した。

Table 1 被調査者数

学 部		被調査者数
教育学部	男 子	64
	女 子	87
経済学部	男 子	61
経営学部	男 子	55
工 学 部	男 子	51
計		318

## 2. 結果と考察

### (1) 新入生の社会的背景

#### a. 出身高校所在地

前回の調査にくらべると、全学部とも神奈川・東京出身者が減少している。教育学部の変化をFig. 1に示す。他の3学部にくらべると、教育学部の学生には神奈川・東京の出身者は多い。ちなみに、経済学部は51%から37%へ、経営学部は53%から24%へ、工学部は65%から44%へ、それぞれ減少している。本学は、かなり広い範囲から学生を集

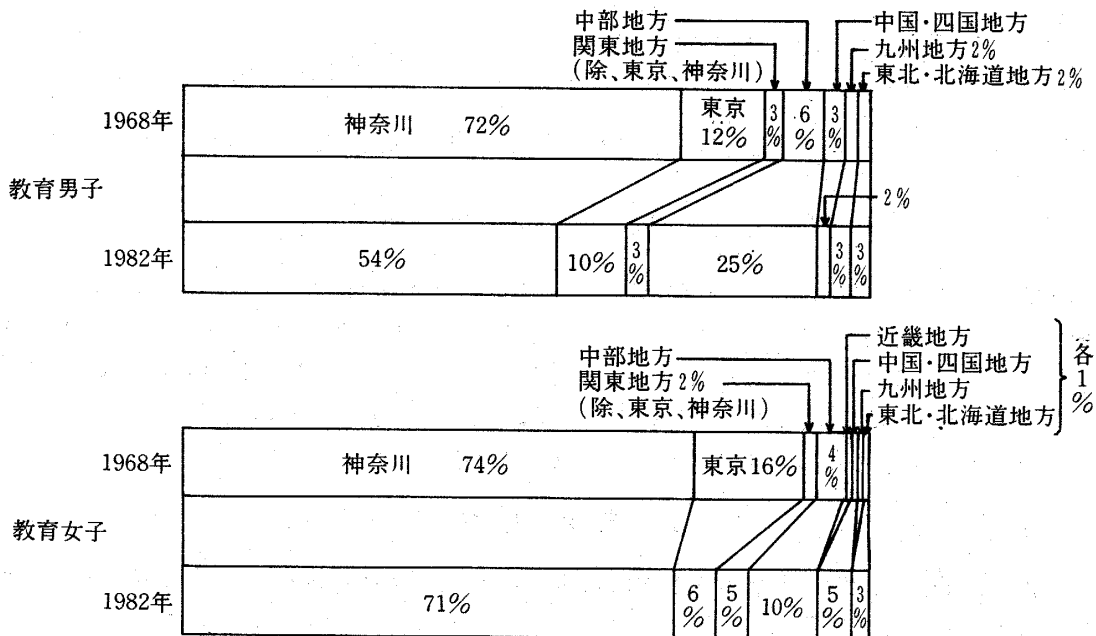


Fig. 1 出身校所在地

めるようになった。

b. 通学場所

東京・神奈川以外の道府県出身者が増加したため、当然のことながら自宅から通学するものは減少した。学部別にみると、自宅通学者がもっとも多いのは教育学部女子で84%，もっとも少いのは経営学部の24%である。

c. いわゆる浪人経験の有無

学部によって、変化のしかたが違っている。教育学部だけは、いわゆる浪人経験者が増加している。とくに男子に著しい。他の3学部では、浪人経験者が減少している。教育学部男子と経済学部の結果を Fig. 2 に示す。いわゆる現役で入学したものは、教育学部女子では85%から75%へ、経営学部では53%から69%へ、工学部では40%から53%へと変化している。

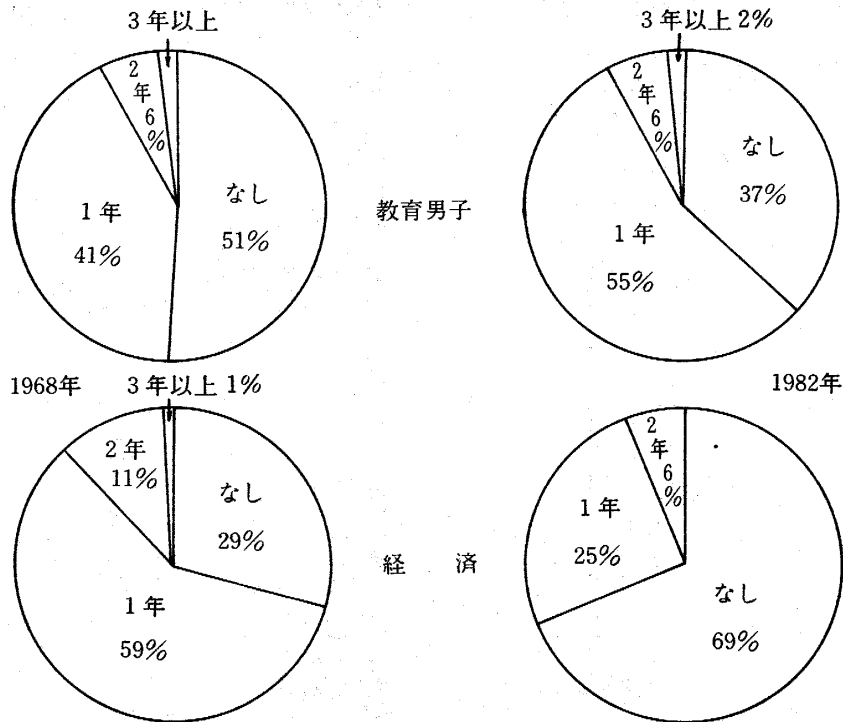


Fig. 2 いわゆる浪人経験の有無

(2) 大学進学のための目的

a. 大学進学のための目的

どのような目的で、大学を志望したのかを質問した。8つの回答のなかから、ひとつを選択させた。結果は Fig. 3 のとおりである。前回の調査結果にくらべると、かなりの差がある。

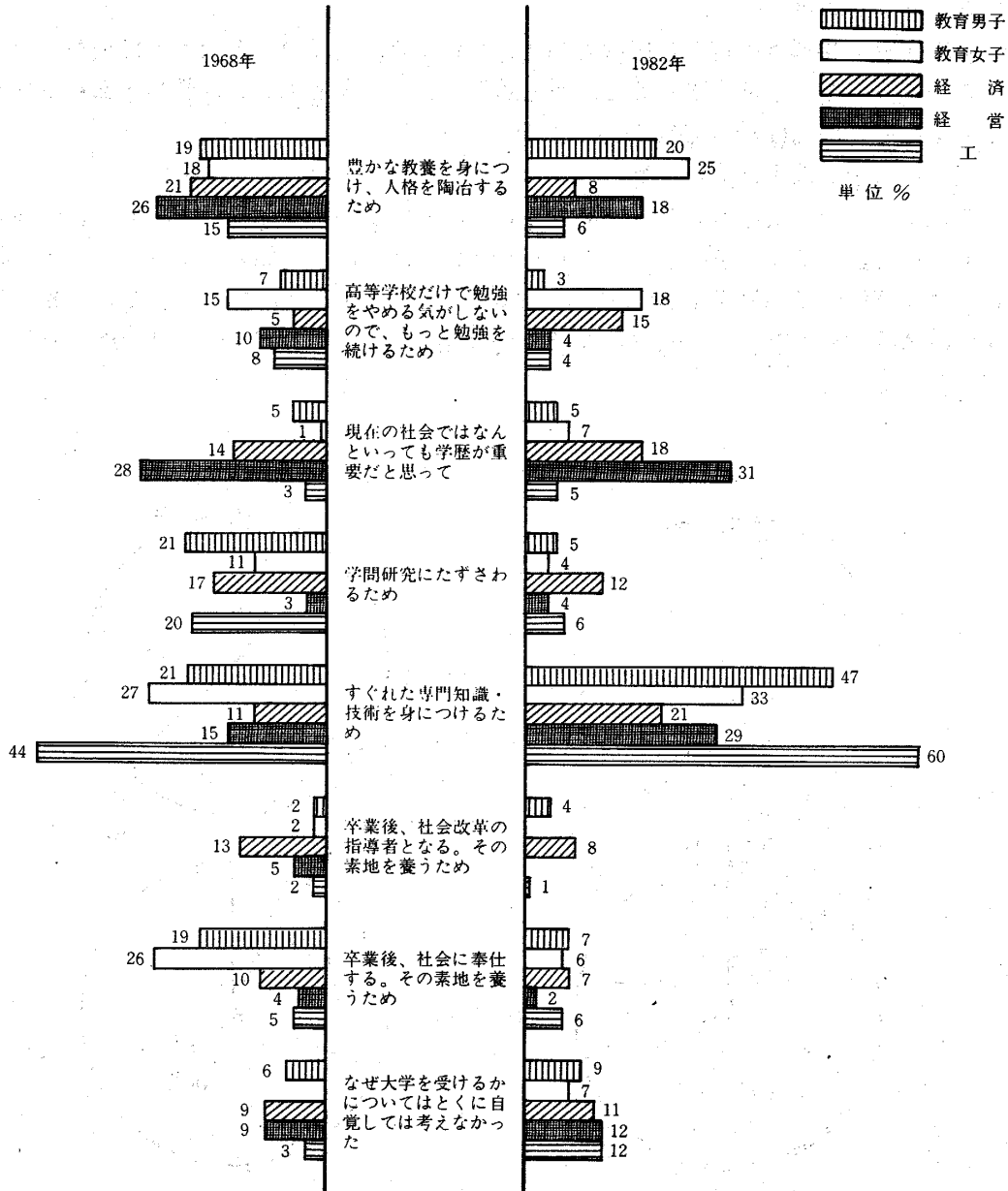


Fig. 3 大学進学 の 目的

「すぐれた専門知識・技術を身につけるため」を選択したものが増加している。工学部では前回は相対的に多かったのであるが(44%),今回調査では60%に達した。

「なぜ大学を受けるかについては、とくに考えなかった」というものが、わずかではあるが増加している。ベルトコンベアに乗せられたように、無自覚のままに入学している学

生が今後もふえていくと予想される。

「現在の社会では、なんとんでも学歴が重要だと思って」と回答したものが微増していることも気になる。

これ以外の項目を選択したものは、いずれも減少している。「学問研究にたずさわるため」も、かなり減った。現代の青年にアカデミズム志向を求めるのは、無理なのであろうか。「社会の改革や社会への奉仕を考える」ものも、減少している。「無気力」が反映している。共通一次試験の得点によって自分の地位を定め、それに甘んじている姿がうかが

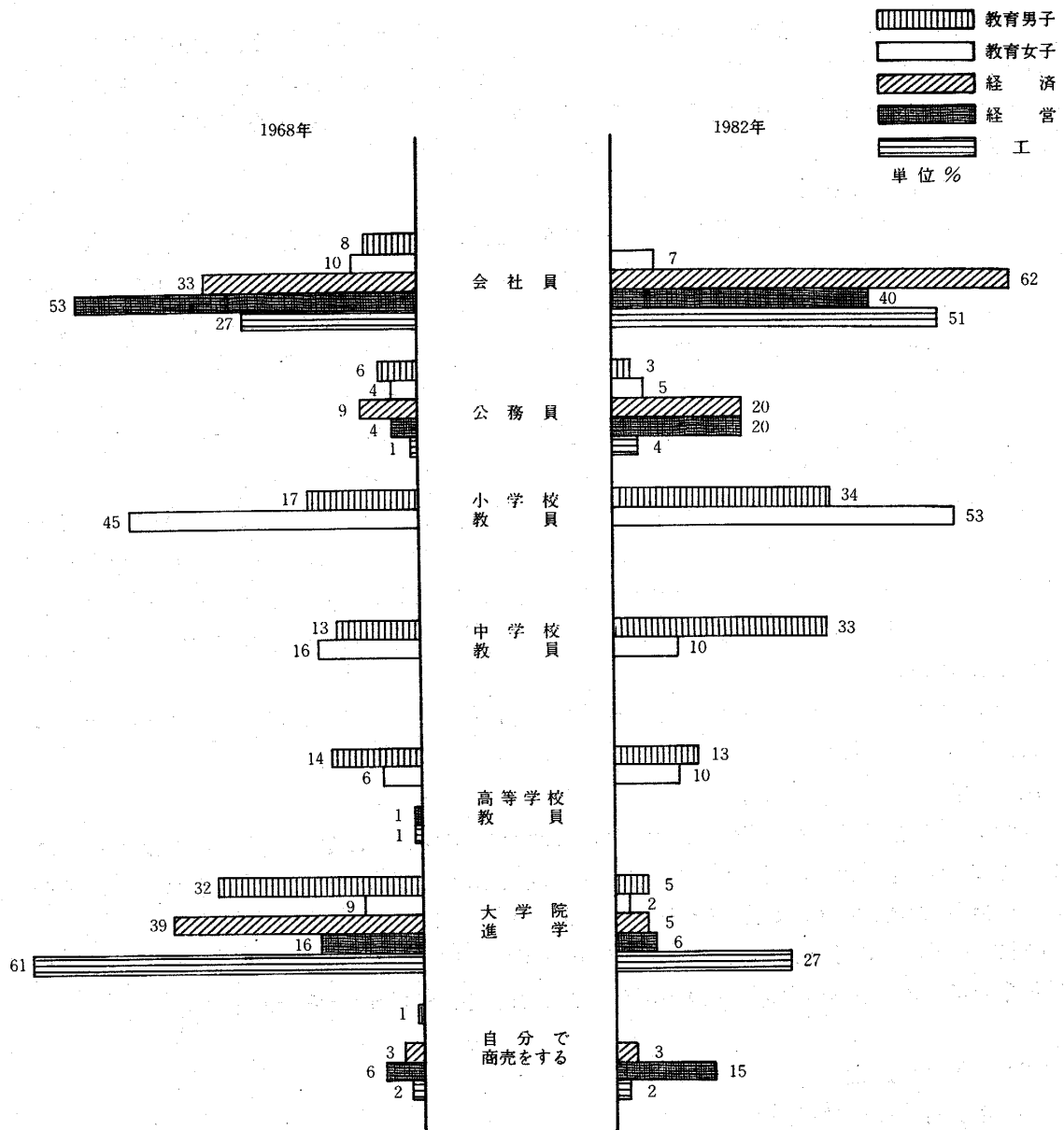


Fig. 4 卒業後の進路

える。

#### b. 卒業後の進路

卒業後の進路も、大きく変化した。結果を Fig. 4 に示した。全学部共通にいえることは、大学院進学希望者の激減である。教育、経済、経営の3学部では1割以下になってしまった。大学入学の目的の「学問研究にたずさわるため」の減少と対応している。前回の調査では、工学部の61%を筆頭にかんがりのものが進学を希望していた。当時は本学は二期校であり、一期校入学者に対する対抗意識もあったかもしれないが、それでも、アカデミズム志向は強かったと考えられる。最近の新入生は受験勉強のために、学問研究への熱意を失ってしまったのであろうか。

教育学部では、教員志望者が増加した。とくに、男子に顕著である。経済学部では会社員・公務員志望者が、経営学部では公務員・自家営業志望者が、工学部では会社員志望者がふえた。わが大学は高校生にとって、サラリーマンまたは教員を養成するところと受けとられている。

#### c. 本学選択の理由

なぜ本学を志望したかを問い、23の項目を列記しそのなかで自分の考えに近いものを、いくつでも選択させた。結果の一部を、Fig. 5 に示した。前回の調査でも、消極的な理由で本学を選択したものが多かったが、今回の結果ではこの傾向はさらに強まった。「優秀な教授がいるから」、「入試が難関といわれているから」、「すぐれた学生が集まっているから」の3項目は、前回経済・経営学部のもので、かなり選択していたが、今回はいずれも激減した。「施設が整っているから」を選択したものは、前回よりふえている。とくに、工学部で著しい。統合が完成したのであるから、当然のことともいえる。

消極的な理由のなかでは、各学部とも「成績順位から自動的にきまった」を選んだものが増加し、「ほかのある大学に入れなかったので」を選択したものが減少した。教育学部では、前回も相対的に多かったのであるが、「親が横浜国大を望んだから」がさらにふえた。また、「自宅から通学できるから」も、相変らず多い。教育学部の学生は、家庭依存の姿勢が強い。

ひとことではいうならば、高校生は「国立で学費が安く」、「成績順位」から自動的にきまったから本学を志願しているのである。

#### d. 学部・学科選択の理由

入学した学部・学科を選択した理由をたずねた。9つの項目をならべ、あてはまるものをいくつでも選ばせた。前回の調査結果と大きな相違はなかった。「将来の進路を考えて」、「自分のやってきたことから考えて」を選択するものが多かった。

「実力相応のところと思って」を選んだものがやや減少し、「就職のとき有利だということを考慮に入れて」を選んだものが増加した。社会状況の反映と考えられる。

### (3) 受験生活

#### a. 高校時代の生活の重点

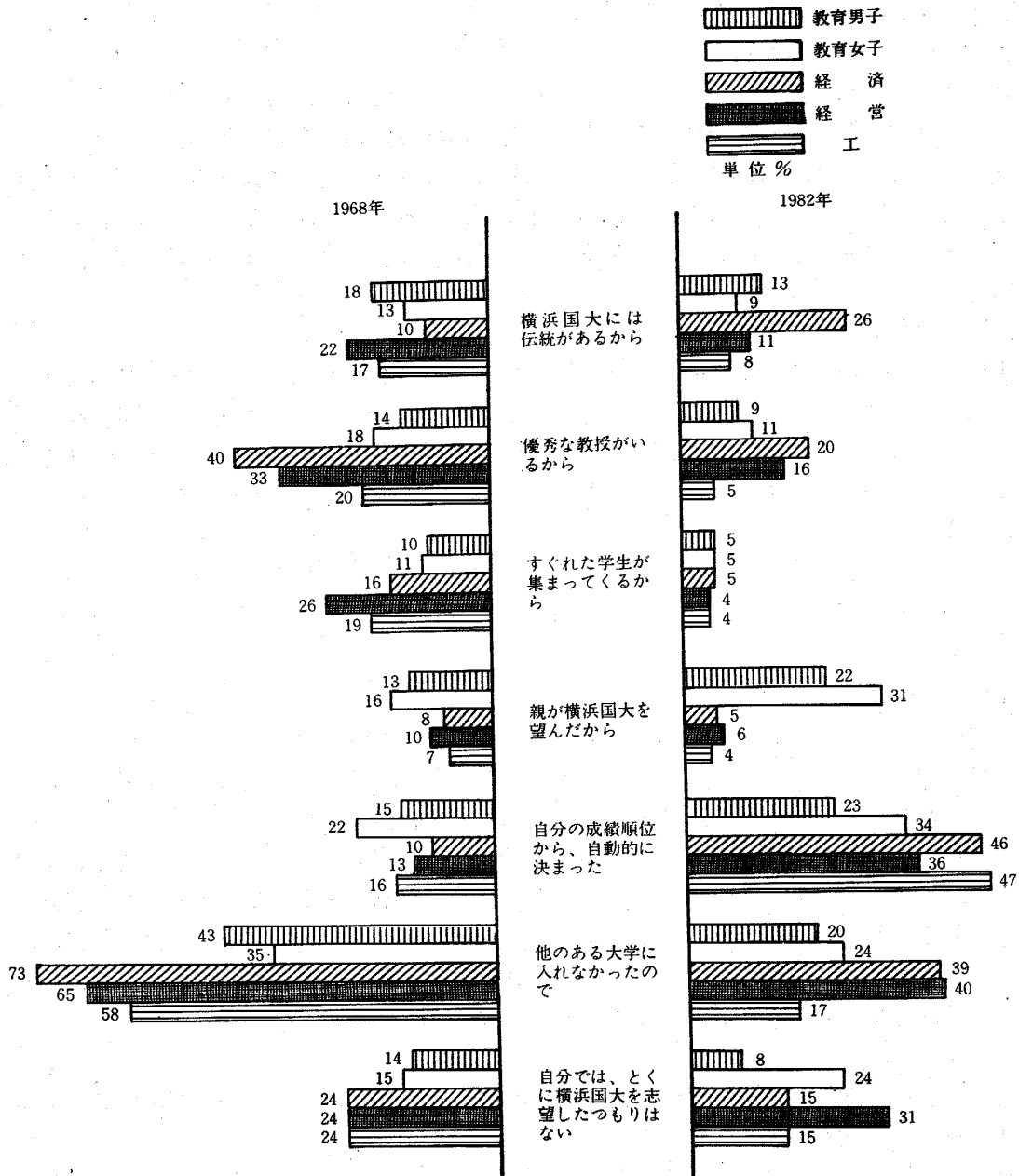


Fig. 5 本学志望の理由 (複数回答)

16の項目をあげ、高校時代に重点をおいたものを選択させた。前回調査の結果とは、かなり異っている。受験勉強、予習・復習を中心とした勉強を選んだものは減少し、仲間といっしょにワイワイやること、運動部の生活、文化クラブの活動を選択したものが増加している。「受験地獄」にいるとは考えていない。けっこう高校生活を楽しんでいる。悲

壮感がない。共通一次試験の効果があらわれたといえるのであろうか。しかし、反面「ひたむきさ」が感じられなくなった。

b. 高校時代にやれなかったこと

高校時代の生活の重点と同じ項目から、ぜひやりたいと望んだが実際にはできないかったものを選択させた。前回同様、広い視野を身につけるための勉強、運動部の生活、異性の友人を得ることが多く選択された。前回にくらべ今回多く選択されたのは、受験勉強と余裕をもってのんびり暮すことであった。逆に選択するものが減少したのは、自由に思索すること、真の友人をつくることである。幼児性から脱却できていない高校生が増加していると考えられる。

c. 受験生活の認知

受験生活をどのようなものとうけとっていたかを明らかにするため、16の項目をならべ実際の経験に近いものを、いくつでも選ばせた。全体として前回同様、「受験勉強のために、ほかのやりたいことができなくて残念だった」、「受験を気にかけてはしたが、友だちもみなやっていることでごく当りまえと思っていた」、「成績はだいたいよかったが、万一試験で失敗しないかと不安だった」、「大学にはいるための手段と割り切って適当にやった」が多く選ばれている。前回と多少異なる点は、「やりたいことができなくて残念だった」が減少し、「割り切って適当にやった」が増加している。体制に順応し、おとなしいというメッセージである。

d. 受験生活の意義

前述のように認知している受験生活を、どのように意義づけているかをたずねた。8つの項目を列記し、あてはまるものをいくつでも選ばせた。前回と同様、「受験勉強とはいっても、新しいことをいろいろ学ぶ機会になった」、「自信過剰を思い知らされて、自分の実力を正當に評価する機会となった」が多く選ばれた。前回にくらべると、「志望校にはいるためにはやむをえない生活だ、というふうに物事を割り切ることを知った」を選択したものが増加し、「人生とは戦いであるということを知る機会となった」、「生活規律を身につけ、克己の精神を養う機会となった」を選択したものは減少した。全体として、攻撃的な姿勢がうすれ、自分がおかれた状況をすなおに受けいれている。

e. 親子関係

大学入学前の親との関係をたずねた。5つの項目のなかから、ひとつを選択させた。結果は Fig. 6 に示した。

前回調査同様、「たいてい、親と話しあってやってきた」、「親は自分に対して自由放任だった」が多く選択されている。経済・経営学部入学者には、ほとんど変化はない。けれども、教育・工学部入学者では「話しあってきた」を選んだものが増加し、「自由放任だった」を選択したものが減少した。両学部では、親から精神的に独立できていないものが増加していると考えられる。

f. 高校の教師との関係

高校の教師との関係をたずねた。3つの項目から、ひとつを選択させた。前回同様、全



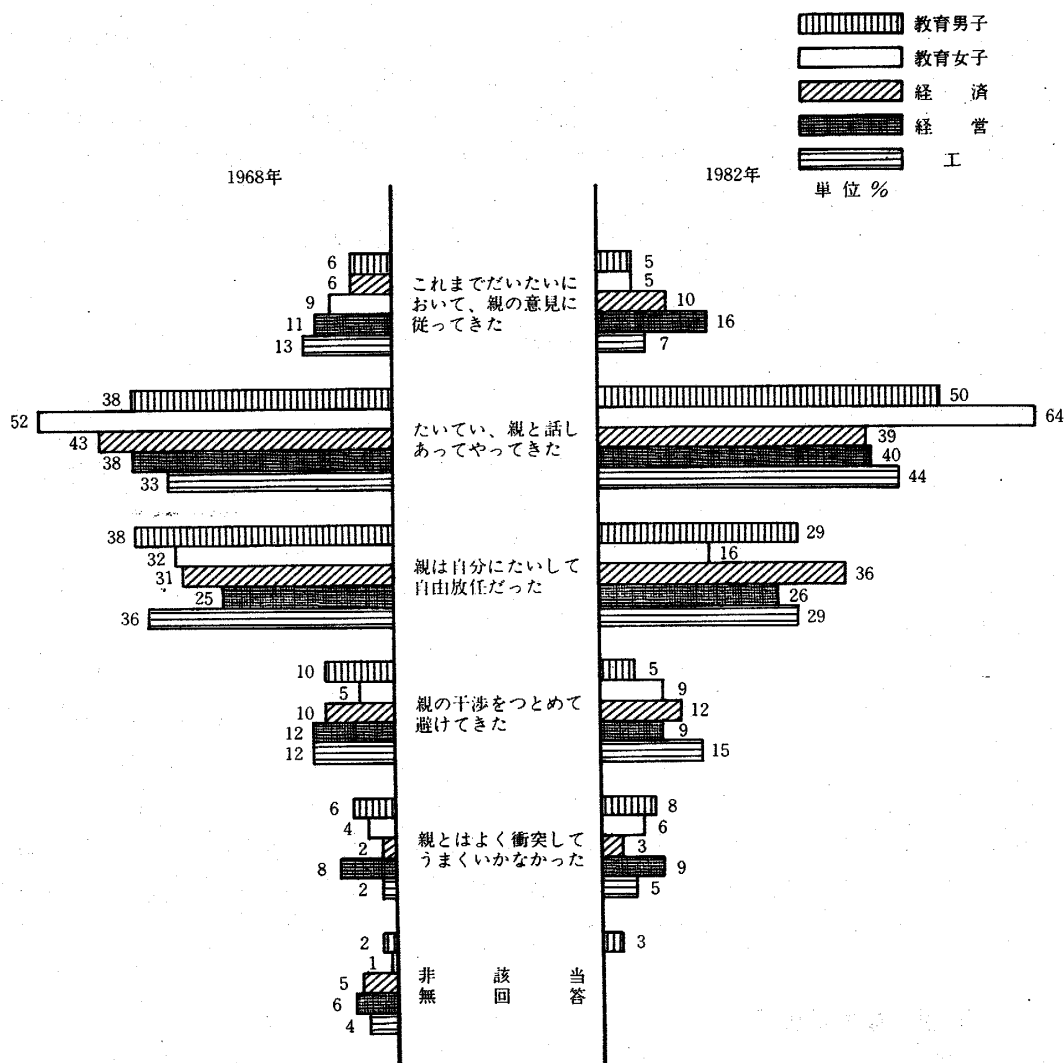


Fig. 6 親子関係

体としては高校の教師から強い影響を受けたというものは少なかった。けれども、教育女子には強い影響を受けたというものがかなりふえた（前回14%、今回27%）。また、「人間的交流はあったが、あまり影響を受けなかった」を選択したものが、ほとんどの学部で増加している。そして、「人間的交流はほとんどなかった」を選んだものは、ほとんどの学部で減少している。人間的交流という点では、高校の教師との関係は良好なものであったといえる。

#### (4) 大学生活への期待

##### a. 大学生活への期待

大学生活にふくまれる23の項目を列記し、期待しているものをいくつでも選択させた。前回の調査結果にくらべると、大きな差違がみられる。「教官との人格的ふれあい」(前回56%~39%, 今回23%~14%), 「政治・社会・経済問題の理解」(前回56%~36%, 今回33%~12%) を選択したものは激減した。また、「自分の生き方について考える」、「登山・スキー・キャンプ・旅行」を選んだものも、かなり減った。さらに、前回調査で少数であるが選択された(最高は経済学部の13%)「学生運動」は、今回誰からも選ばれなかった。これに対して、前回ほとんど問題にならなかった「みんなといっしょにわいわいやること」が、3割から6割のものに選択されている。「軽くスポーツを楽しむ」を選んだものも、前回よりかなり増加している。

十数年まえの新生は、大学生活を「教官と人格的にふれあい、専門科目の講義をきき、真の友人をつくり、自分の生きかたを考え、政治・社会・経済問題を理解する場」とみなしていた。最近の新生は、このようなことに関しては、あまり大きな期待を持っていない。「軽くスポーツを楽しみながら、みんなといっしょにわいわいやる」と考えている。要するに、4年間楽しく暮し、適当に勉強して就職しようと思っているのである。

##### b. 期待する講義

大学の講義として、どのようなものを期待しているか。7つの項目のなかからひとつを選択させた。前回同様、「専門的な講義」が多く選ばれている。けれども、前回選択者の多かった「人生について考えさせる講義」は、教育学部の男子を除きかなり減少したし(前回29~14%, 今回22~9%), 「アカデミックな雰囲気のある講義」は激減した(前回25~9%, 今回9~2%)。それに対し、前回選択者が少なかった「知識が豊かになる講義」は増加している(前回12~3%, 今回30~12%)。すぐに役に立つ実用的な講義を期待している。アカデミックなものへの期待は弱まっていることが、ここにもあらわれている。

#### (5) 理想的な大学生像

##### a. 理想的な大学生像

学生のタイプを15項目列記し、それぞれのタイプを「大いによい」「悪くない」「よくも悪くもない」「どうかと思う」「けしからん」の5つの段階に評定させた。そして5つの段階に+2点から-2点までの得点を与えた。前回の結果と今回の結果を対比したものがFig. 7である。

理想的な大学生像にも、かなり変化がみられる。前回より高く評価されたタイプは、「運動部の活動に没頭する」、「適当に勉強して学生生活をエンジョイする」、「文化クラブ活動に専念する」、「クラス活動に専念する」、「趣味・娯楽に大きな時間をさく」(この項目は前はマイナスに評価されていたが、今回はプラスの評価をうけた)「授業にはでないが、自分で勉強する」である。これに対し、前回より低く評価されたタイプは、「セツルメントその他の社会的実践活動に専念する」、「哲学や文学の本を読み、一人で考えて

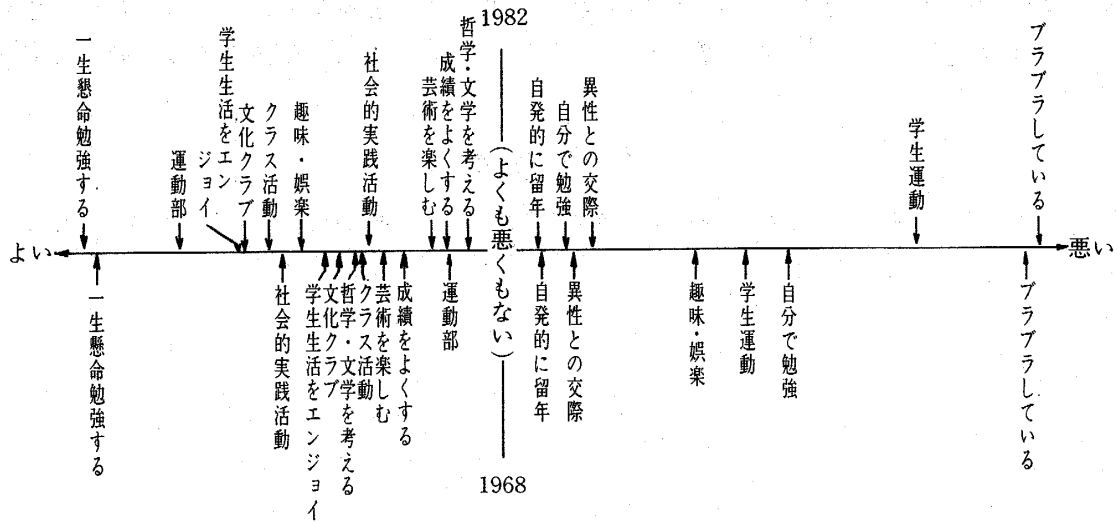


Fig. 7 学生のタイプの評価

いる」、「学生運動に専念する」である。ここにも、政治的関心の低下とあまり苦労しないで楽しくすごそうという姿勢が、強く反映している。

b. 自分自身のタイプ

自分はどのようなタイプの学生になりそうかをたずね、前問の15のタイプのなかからひとつを選択させた。前回同様、「適当に勉強して、学生生活をエンジョイする」を選んだもののがもっとも多いが、前回よりさらに増加している(前回50~30%, 今回53~45%), 新入生の半数が、このタイプになることを予想している。ついで多く選ばれたのは、「大学で教わることを一生けんめい勉強する」タイプであるが、選択したものは前回より減少している(前回27~16%, 今回21~6%)。

3. 要 約

われわれは1969年4月、本学に入学した新入生を対象に、大学生活に対する期待など、彼らの持つ生活意識の調査をおこなった。以来、十数年が経過し、大学入試制度を大きく変わった。われわれも、学生の考えかたや感じかたが昔とは違ってきたのではないかという感想をもっている。そこで、1982年に入学した学生に対し、1969年におこなった調査の再調査を施行した。十数年間の変化を明らかにするのが、この調査の目的である。主要な結果は、つぎのとおりである。

- (1) 新入生の出身高校が全国規模に拡大されている。
- (2) 大学進学のための目的は、就職のためと考えている。大学院進学を考えているものは、激減した。アカデミックな勉学への関心や興味は、ほとんど持っていない。
- (3) 高校時代、あるいはいわゆる浪人時代の成績によって、本学を選択している。積極的な理由で本学を選んでいるのではない。

- (4) 高校生活をふりかえって、満足しているというものが多い。
- (5) 大学では、軽くスポーツを楽しみながら、みんなでわいわいやろうと考えている。適当に勉強して、4年間を楽しくすごそうというのが、現代の大学生の基本的な姿勢である。

#### 参 考 文 献

- 1) 依田 明：本学学生的生活意識—その1—，横浜国立大学教育紀要，第7輯，23～38，1967.
- 2) 依田 明：本学学生的生活意識—その2—，横浜国立大学教育紀要，第8輯，98～122，1968.